

特 別 講 演

インドネシアにおける文化の伝承と発展

大阪大学 文学博士 谷 村 晃
文学部教授

Ko TANIMURA

インドネシアはフィリピンよりもさらに南、赤道直下に点在する 1万3千以上の大きささまざまな島からなる国である。首都ジャカルタ、古都ジョクジャカルタ、商都スラバヤなどで有名なジャワ島は、世界でも最も人口密度の高いところである。このジャワ島は赤道の直ぐ南側にあり、南十字星を仰ぐことのできる常夏の島である。

インドネシア共和国はこのように日本からはるか遠い南の国であるにもかかわらず、なぜかわれわれ日本人にとってとても身近に感じられる。インドネシア人はマレー系の黄色人種であるが、肌の色は日本人よりもやや黒い。髪も目も黒く、体形、容貌など比較的日本人に似ている。米を主食とし、餅などの粘着性の食物を好み、冠婚葬祭に多額の金を使うなど、日本人の生活習慣に近いところも多く見受けられる。

しかし他方インドネシアは古代以来、民族移動の十字路として、ネグリート、マラヤ、メラネシア、中国、インド、アラブの諸民族、さらに近代には西欧人の血も加わり、いわば民族の一大坩堝の感を呈している。それはまた同時にインドネシアが言葉の宝庫であることをも意味する。もちろん今日インドネシアでは、義務教育において共通の公用語としてのインドネシア語の普及をはかっているが、各家庭、村落、各地方の文化を担っているものはジャワ語、スダ語、バリ語といった方言である。人形芝居や歌の言葉はすべてこうした地方の言葉で上演される。インドネシア全土にはこうした方言が 250 以上もあるといわれているが、その実態を把握することは極めて困難である。それは東北弁と鹿児島弁の差よりも大きい。一民族、一言語を特色とする日本とはまるで異なる世界である。もちろん言葉の多様性は文化の多様性につながる。宗教の面でもインドネシアは日本よりもはるかに複雑である。ワヤン・クリ（影絵芝居）に登場する世界はインドの〈ラーマヤナ〉の世界、ヒンズー教の世界である。しかしそれは同時にインドネシア人がスクリーンの彼方に見る祖霊の世界とも二重写しになっている。さらにイスラム教の伝来以降は、ジャワの〈影絵芝居〉のなかにイスラムの教えも盛り込まれることとなる。ヒンズー教と並んで仏教も古くから伝来し、8～10世紀頃には、中部ジャワのボロブドールを中心に、一大仏教建造物群を生み出した。その後仏教は衰え、ヒンズー教の王国が11世紀以降栄える。マジャパヒト王国（1293—1524年）の時代には、ジャワを中心に政治的、経済的、文化的に強大な統一国家が形成された。しかし仏教、特にヒンズー教は、インドネシアではそれ以前から存在した呪術的、祖霊崇拜の原始信仰と混り合って、インドネシア独自のヒンズー・インドネシア文化、ヒンズー・バリ文化へと変容し、広く人々の生活習慣の奥深くにまで浸透した。他方華僑の進出による中国の思想や文化の影響も見逃がせない。

14世紀頃から新たにイスラム教が北スマトラからジャワ島北岸にかけて広まり、在来のヒンズー・

インドネシア文化をイスラムに改宗させながら、ほぼインドネシアの全域に侵攻した。イスラム教の進出はヒンズー世界のカースト制度の否定、多神教から一神教への転換、ヒンズー教王国の崩壊につながった。イスラム勢力に追われたヒンズー王国の一族はバリ島に亡命し、そこに独自のヒンズー・バリ文化の世界を築いて、今日に至っている。バリ以外のインドネシアのほぼ全域に、14～16世紀の間にイスラム化されてしまった。しかしインドネシアのイスラム教はアラブ世界のイスラム教ほど厳しくなく、先行のヒンズー・インドネシア文化と混在して、いわばイスラム・インドネシア文化を形成することとなった。

17世紀になるとオランダのインドネシア植民地化が始る。オランダはインドネシアにおけるイスラム勢力が、貿易や植民地政策の邪魔になるものとして、これを弾圧した。その結果イスラム勢力は半ば地下にもぐり、徐々に民族主義的、反植民地支配的、汎イスラム運動へと発展し、オランダの植民地支配に抵抗するための精神的支えとなって行った。ヒンズー教もイスラム教も土着の人々の思考法を彼らの思考法に転換させようと懸命に努力した。影絵芝居を始めとするさまざまな伝統芸能は、ある意味では重要な宣教の道具であったとも考えられる。これに反してオランダ人は西欧的な自由主義思想がインドネシア人の間に浸透し、インドネシア人が啓蒙されることを嫌った。インドネシア人に政治的自由を与えるよりはむしろ、その封建主義や貴族制の強化をはかった。教育面においてもオランダはほとんどなにもしなかった。オランダにとってインドネシア人はかの悪名高い強制栽培制度の労働力にしか過ぎなかったのである。しかしその結果この約300年に及ぶオランダ植民地時代に、インドネシアの伝統的宮廷文化がかえって強化育成されることにもなった。

第2次世界大戦によって日本は、1942年にインドネシアを占領して、オランダを追い出した。特に戦後の独立運動の戦火のなかで、日本はインドネシアの民主主義の形成に対して、一種の触媒的役割を果たした。明治維新とその後の急速な日本の近代化は、西欧の植民地支配に苦しむアジアの諸国にとって、見習うべき手本と思われた。戦争中に日本がスローガンとした大東亜共栄圏の理念も、西欧勢力追放を願うインドネシア人によって、希望の光として歓迎されさえした。少なくとも第2次大戦中の日本は、インドネシアに対しては一種の懐柔政策をとった。当時の日本の軍部は特に軍事訓練と教育の普及に力をいれた。それはインドネシア人を訓練して、日本の同盟軍へと育成しようとする狙いであった。日本軍の占領期間は短かったが、その間日本がインドネシアとインドネシア人に与えた心理的、精神的衝撃は相当なものであった。インドネシアの苦しい独立戦争はインドネシア人自身の手で勝ち取られたものであることはいうまでもないが、その過程で日本が有形無形に影響を及ぼしたこともまた否定できない。

インドネシアは日本とは異なり、政治的、社会的、経済的に絶えず外部勢力に踏みこじられながら今日まで来た極めてタフな国である。その強靱さを支えるものが、実はインドネシア人の心、つまりその文化(kebudayaan)であると考えられる。どうしてそのようにいえるのであろうか。

インドネシアの人口は1億2千万人を越えると思われる。その国土は日本よりもやや広いが、隅々まで開拓されたジャワ島やバリ島は別として、国土の大半は深い熱帯樹林におおわれた大小無数の島々である。ジャカルタのように1Km平方当り8000名近い住民が住む過密地と、1Km平方に2名しか住まない西イリアンのような過疎地との対比はもちろんのこと、人口の半分の6000万人がジャワ島に集中していることは、インドネシアにとって由々しき問題である。しかもそのジャワ島も大部分は農村であって、近代的な工業化は遅々として進んでいない。このような状況のなかで、

インドネシアの文化について語ることに極めて困難である。

普通われわれ外国人がインドネシアの文化というときには、それは主としてジャワ島及びバリ島の文化をさす。しかしスマトラやカリマンタン、スラウェシ、ティモールにも古くからその土地固有の文化があることはよく知られている。ただ 2000 年に及ぶ歴史の流れを振り返り、またオランダ植民地時代から 1949 年の独立を経て今日に至ったインドネシア共和国の発展を巨視的に見た場合、やはりジャワ・イスラム文化と、バリ・ヒンズー文化がその伝統の深さと影響力から考えて、インドネシアを代表する 2 大文化であると見てよいであろう。

それにしてもここでいう文化とは一体なんであろうか。高層建築、便利な交通網、情報収集と伝達の迅速性といった近代の都市文明を考えるならば、インドネシアは今まさに発展途上国であるといわざるを得ない。首都ジャカルタには大阪と同じような高層ビルも立っているし、大通りは常に交通渋滞を起すほど車が多い。しかし歩裏通りに回ると、川にはいって洗顔と洗濯をしている人の間を家鴨が遊泳する田舎 (kampung) が見られる。ジャワ島やバリ島は、火山を含む高い山岳地帯は別として、耕せるところはほとんど耕しつくされている。中央に高い山を頂く島では、日本と同じく平野部が少いので、山腹を削って、段段畑式に水田を形成する。長い経験から工夫された見事な灌漑用水制度が稲の二毛作、三毛作を可能にするのである。それは高い山に降った雨水を、一滴の無駄もなく水田に引き、順次高い水田から下の水田へと灌漑していくための装置であり、またそれを維持するための社会制度でもある。インドネシアでは一年は雨季と乾季に二分される。雨季には雨はスコールとなって集中的に降る。乾季には雨は降らない。熱帯樹林の山から湧水する水を有効に使わなければならない。この気まぐれな天水の供給を人工的に貯水し、コントロールするのが灌漑用水制度である。その意味ではバリ島やジャワ島は、山の中腹まで扇状に形成された水田によって、島全体を一大貯水池と化して、水をコントロールしていると見てよいであろう。水稻農耕に依存するインドネシア人にとって、水の管理は、村落共同社会の要である。水と土 (水田) の利用と管理は決して単なる一個人の問題ではなく、個人が帰属する集落、村落の死活につながる問題である。

独立後のインドネシア共和国には、中央政府の命令が末端の個人にまで到達するための行政組織は整備されている。しかしそれは独立記念日のような国家的行事の遂行とか、兵役、学校教育制度などについては十分に機能するが、日常生活、村の道普請、冠婚葬祭儀礼、そして水田の維持管理といったことに關しては、村の長老を中心に組織される一種の共同体の自治組織が機能しなければならない。中央政府の政令も、この共同体の慣習法 (Adat) を無視して、一方的に施行することはできない。インドネシアが掲げるスローガン〈多様のなかの統一〉 (Bineka Tunggal Ika) の真意も実はその辺にあるのである。

この多様な地域差にもかかわらず、全てのインドネシア人が好んで使う言葉は、〈祖国〉を意味する Tanah Air である。それはつまり土地と水、ないしは水に浸された肥沃な土地を意味する。私もこの言葉が好きである。それは政治体制や国家の概念を越えた、極めて感覚的な言葉である。Tanah Air から素足の肌に伝ってくる水のぬくもり、天の恵みとしての稲穂の香わしい匂いが直接感じられる。日本語でこれに対応する言葉は〈豊葦原瑞穂国〉である。そしてこの Tanah Air を豊かな恵み多い自然として、そのなかに平安に暮すための法と秩序、共同体の調和がアダット

(Adat)にほかならない。従ってアダットは共同体における生活の術である。アダットが巧く機能して、灌漑用水制度が適格に働いたとき、インドネシアの自然な Tanah Air として、そこに住む人々の上に豊饒をもたらすのである。

アダットは村落共同体を維持し、その成員の家族制度、家族の住居の建築や構造を規制し、結婚の斡旋をし、家庭間の親子兄弟の個人的な関係にまで介入することもある。従ってそれはまた共同体が行う踊り、影絵芝居、ガラムン音楽といった伝統文化の保存と育成にも深くかわり、各共同体が独自に保持する文化伝承に一種の普遍性を保償する役割も果す。つまりアダットは共同体維持装置として、文化の枠の中できずなとして作用し、それを他の文化と区別して保存、伝承、発展させると同時に、それはまた村落共同体内の人々の行動のパターンを規制し、それに掣肘を加える目に見えないきずなとしても働くのである。かくして村落共同体は極めて強い閉鎖性を持った運命共同体となるのである。インドネシアではく相互扶助>(Gotong Royong)と称して、災害時などには村をあげての助け合いが行われる。それは見方によれば一種の相互監視の制度であり、共同体の成員を共同体の集団のなかに固定さすための制度である。つまりこの相互扶助の輪に加わらない個人は、いわゆる村八分に合うこととなるのである。

影絵芝居、仮面踊り、ガラムンなどのいわゆるインドネシアの伝統芸能は、クブダヤン (ke - budayaan 伝統文化) と呼ばれるが、こうした伝統芸能はそれを保持する共同体社会のアダットと、その共同体の人々が日夜肌で感じている Tanah Air なしには到底考えられない。これらの伝統芸能を成立させている具体的な規則や秩序の複雑な相互依存的構造自体、アダットの法と秩序とその調和を反映しているとも考えられる。

ということはインドネシアの伝統文化は、西欧的、個人主義的近代化や、個人民主主義とは根本的に相容れないものであり、極論すればそれはインドネシアの近代化を阻むものであるといえる。今のところインドネシアのすぐれた伝統文化の保存、育成とインドネシア共和国の都市化、近代化とを調和させる方策は見つかっていない。日本を始めとする多くの外国人観光客が、インドネシアの伝統文化に注目し、それを高く評価すればするほど、インドネシアの伝統文化の保存と近代化との対立矛盾が深刻な問題となって浮び上ってくるのである。このことを分り易い例で示すならば、ジャワ島の隅々まで電気が通じ、全家庭にカラーテレビが普及すれば、恐らくジャワの影絵芝居は消滅しないまでも、大巾に変貌せざるをえないであろう。幸い当分そのような状況には至らないと思われる。

われわれ日本人にとってインドネシア文化とは何なのであろうか。それは明治維新以来の余りにも急速な近代化と経済成長の流れのなかで、いつの間にかどこかに置き忘れてきた<豊草原瑞徳国>なのである。日本人はもともと Tanah Air の住人として自然の懷に抱かれた高温多湿のアジアの農耕民族の世界に住んでいた。それがここ 100 年の間に一挙に西欧的近代世界に移行することとなった。その高度成長はアジアの諸国民にとっては羨望の的であるが、同時にそれは日本の自然と社会に多くの歪みと、不均衡を生み出してきた。その意味では発展途上にあって、遅々としてその近代化が進まないインドネシアの生活と社会のなかに、アジア人のほんとうの心を読み取ることができる。近代化の点では日本はインドネシアに手本を示したことになるかも知れないが、自然の懷に抱かれた人間の幸福、文化伝統の重みといった今ひとつの人間の貴重な価値の面では、日本人は、どこかにわれわれに親近感を与えてくれるインドネシアから学ばなければならないものを多く持っているように思える。